法華寺阿弥陀浄土院の調査
―第604次

1　はじめに

本調査は個人住宅建設にともなう事前発掘調査である。本調査地は、法華寺阿弥陀浄土院と考えられている平城京左京二条二坊十坪の東北部に該当する（図288）。法華寺中心伽藍の中心線からはやや西にずれる。当地の南西側の調査地では、複数の時期にわたる掘立柱建物等を検出した（第183-21・282-6次調査）ほか、坪の東北隅にあたる東側の調査地では、奈良時代の柱穴を検出している（第512次調査）。また、坪の西北隅の調査地では４棟の東西棟の掘立柱建物をはじめとした３期にわたる遺構を検出している（第80次調査）。坪の南半では奈良時代の護岸や石敷などの遺構を検出し、阿弥陀浄土院の中心部に苑池遺構の存在を確認した（第312次調査）。

調査区は南北５ｍ、東西６ｍの計30㎡（図289・290）、調査期間は2018年11月５日から11月12日である。

2　基本層序

層序は地表から、①現代の造成土（約100㎝）、②床土（約30㎝）、③青白色土（包含層 約15㎝）、④淡褐色土（包含層 約５㎝）、⑤砂質土（地山）である。⑤の上面（標高約60.5ｍ）で遺構検出をおこなった。

3　検出遺構

東西溝SD11291　調査区南半で検出した素掘溝。東西約2.6ｍにわたって検出した。幅2.5ｍ以上、深さは最大で約0.6ｍ。底面は西から東に傾斜している。わずかに中世の土師皿や奈良時代の須恵器などの細片が出土したのみであり、このような出土遺物の状況から、中世の遺構であると考えられる。

土坑SK11292　調査区西北隅で検出した土坑。南北1.9ｍ以上、東西1.4ｍ以上、深さは最大で約0.2ｍ。出土遺物から中世の遺構と考えられる。

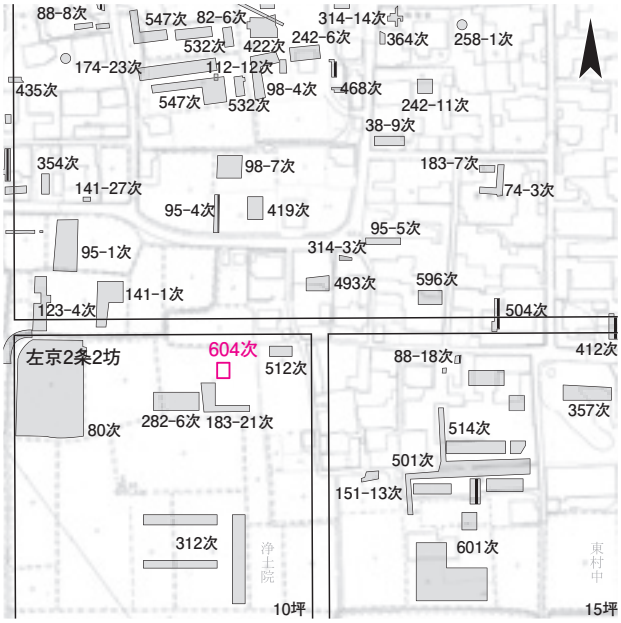

図288　第604次調査区位置図　1：3000

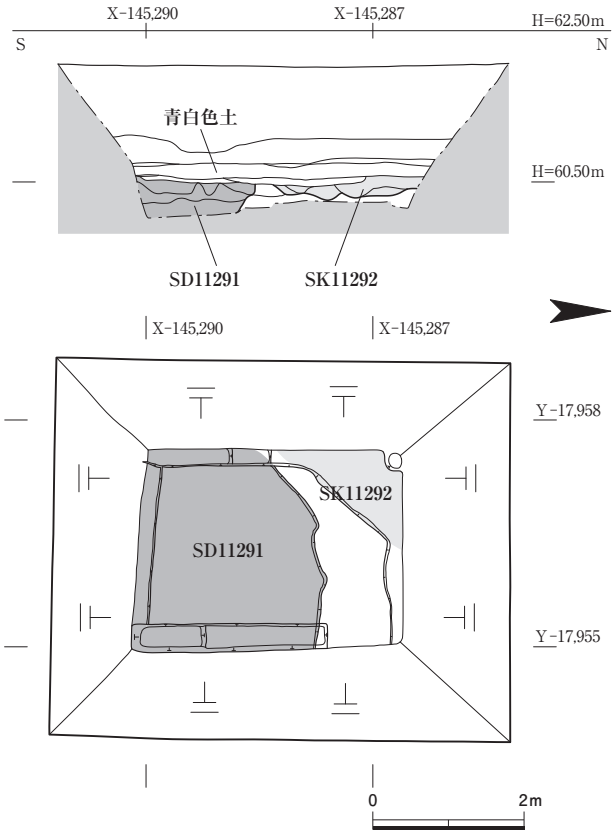

図289　第604次調査遺構図・西壁土層図　1：100

図290　第604次調査区全景（東から）

表41　第604次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
巴（中世）		1	6768	B	1	丸瓦（施釉）	1
古代		1	中世		1		
型式不明(奈良)		2					
軒丸瓦計		4	軒平瓦計		2	その他計	1

	丸瓦	平瓦	磚	凝灰岩	レンガ
重量	5.644kg	15.966kg	0	0	0
点数	53	202	0	0	0

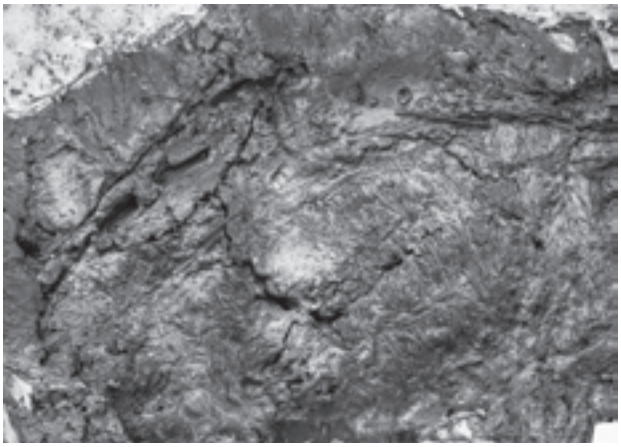

図291　第604次調査出土草鞋

4　出土遺物

土 器 類

本調査では整理用コンテナ１箱分の土器類が出土した。土器は、青白色土や淡褐色土といった包含層のほか、東西溝SD11291や土坑SK11292から、13・14世紀のものを中心とした土師皿や瓦質土器のほか、奈良時代の須恵器も少量出土している。ただしいずれも細片である。

（丹羽崇史）

瓦　　類

本調査で出土した瓦磚類の一覧を表41にまとめた。全体として出土量は少ないが、特筆すべきものとして、阿弥陀浄土院所用瓦である軒平瓦6768Bや、凸面側に緑釉の付着が認められる丸瓦がある。（林　正憲）

草　　鞋

青白色土（中世の包含層）からは草鞋が１点出土している（図291）。周囲と中央に２本の縄紐を芯として、それに直交するように縄を編み込む。足を載せる「台」の部分は約1/2が欠損する。「乳」や「返し」部分は確認できない。残存長約19.0cm、残存幅約8.9cm。（浦　蓉子）

5　ま と め

本調査では、阿弥陀浄土院に関連する奈良時代の遺構を検出することはできなかったが、中世の東西溝・土坑を確認したほか、草鞋という希少な遺物が出土した。

草鞋の出土事例として、平城京内においては、二条大路北側溝（第133次調査）や朱雀大路西側溝（第566次調査）における奈良時代の草鞋（『昭和58年平城概報』・『紀要2017』）のほか、静岡県寺家前遺跡[1]、岐阜県下土居北門遺跡[2]で中世、長野県松本城大手門枡形跡[3]で近世の草鞋がそれぞれ出土している。今後のこうした出土事例の増加に期待したい。（丹羽）

註

1）静岡県埋蔵文化財センター『寺家前遺跡Ⅰ』2012。
2）財団法人岐阜市教育文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所『鷺山遺跡群第１分冊』2011。
3）松本市教育委員会『松本城大手門枡形跡発掘調査報告書』2015。